

Title	ジラルディ・チンツィオ(Giraldi Cinthio)の『百物語(Gli Hecatommithi)』の世界
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学論集. 6 p.219-p.242
Issue Date	1991-12-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79557
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ジラルディ・チンツィオ（Giraldi Cinthio）の 『百物語（Gli Hecatommithi）』の世界

米 山 喜 晟

は じ め に

Giovanbattista Giraldi Cinthio または Cinzio の『百物語（Gli Hecatommithi）』という作品は、シェイクスピアの『オセロ』や『尺には尺を』の原作を含んでいるために、我が国では案外その名が広く知られているイタリア・ノヴェッラ集だと言えそうである。だがそのギリシャ語由来のタイトルと、アンソロジーに採録されるいくつかの問題作を除くと、その全体像に関しては、ほぼ同時代の Bandello に比してもはるかに知られることの乏しいノヴェッラ集であったことは確実である。何故なら Bandello の作品は現代でもすでに何度も刊行されていて、英語の完訳すら存在しているのに対して、この作品はある時期からは、刊行されなくなり、主に16世紀の書物を通してしか読めなかったからである。おそらく近い将来ローマの Salerno Editrice から校訂版が刊行され、それに加えられる解説等によってさらに明確な作家像や作品の全体像が把握できるものと思われる。しかしイタリアのその種の事業が計画通りに進まないことはすでに我々が体験済みであり、この作品の紹介を抜きにしてはイタリア・ノヴェッラ史の16世紀の部分に欠落が生じるので、将来優れた校訂版と解説が現れた時に再検討を加える余地を残しつつ、とりあえず作品の輪郭の紹介と個々の作品の分析とに基づいて、このノヴェッラ集の全体像の紹介を試みたい。

第一章 作品の輪郭

第一節 作者について

『百物語』の作者 Giovanbattista Giraldi Cinthio は英語圏では Cinthio と記されるが、イタリアでは Cinzio と記される方が普通である。しかし本論ではテキストとして用いた1566年にヴェネツィアで刊行されたとされている第二版の Hecatommithi¹⁾の表紙の表記に従っておきたい。後に見るとおりこの作者は同時代のイタリアではノヴェッラ作者としてよりも、批評家、劇作家、修辞学教授として世に知られ、その方面での作品は Cinzio の名前で記されていたもののようである²⁾。しかし国外では恐らく前述の書物とともにその名前が伝わり、特に後世にはシェイクスピアの原作者つまりこの作品の作者として知られたため、このような差異が生じたものと思われる。

Cinthio は1504年、Este 家の下で当時のイタリアでも有数の高い宮廷文化を誇っていたフェルラーラの貴族として生まれ、哲学者、医師としての人文主義的教育を受けた後に、同市の大学で医学や哲学を講師として教え始め、1541年の Celio Calcagnini の死後、Ercole II d'Este の保護の下でその空席を継いで、修辞学の教授に就任した。1537年にラテン語の特集を刊行したのはそのためだという説もある。その後彼はもっぱらイタリア語のみで、評論、悲劇、悲喜劇、詩等を多数書いて、特にイタリアにおける初期の悲劇作者として、イタリアのみならずヨーロッパ全体に重要な影響を与えた、とされている。したがってノヴェッラ作者としての存在は、特にイタリアでは彼の場合必ずしも第一義的なものとは見なされていない。なお1547年から Ercole II d'Este 公の秘書の一人となり、羽振りの良い文学者兼宮廷人であったものと想像し得る。しかし彼のフェルラーラにおける平穏な生活は、1554年に彼の名で刊行された評論「ロマンツィの創作についての論議 (Discorso intorno al comporre romanzi)」の真の作者に関して、彼の弟子でありその保護下にあった新進の文学者(彼同様 Este 公の秘書でもあった) Giambattista Pigna (本名 G.B.Nicolucci) との間で争いが生じたために陰りが生じ、特に1559年 Ercole の死後は状況が一段ときびしくなり、1562年には盗作者の汚名を帯びてフェルラーラ大学の講座を Pigna に明け渡し、さらにその翌63年にはフェルラーラを去らねばならなかった。彼はピエモンテにできたばかりの Mondovì の大学に移り、さらにトリノ大学、そして1568年には由緒あるパヴィーア大学へと移った後、1571年故郷のフェルラーラに帰国、その2年後に死んだ。こうして見ると盗作のスキャンダル以外にはほとんど事件のない、全体としてはむしろ平穏無事な生涯であったと見なし得る。当時の文学者達は極めて喧嘩早く、この種のスキャンダルにもこと欠かなかったものであり、むしろ領主の保護の下で幸運すぎたことが、同じ宮廷の人々の嫉妬を招いて晩年の不幸の原因を作ったようである。

すでに記したとおり、彼は1554年作とされる「喜劇と悲劇の創作に関する談義または書簡 (Discorso ovvero lettera intorno al comporre delle commedie e delle tragedie)」によってアリストテレスの『詩学』やホラティウスの詩論の紹介者として世に知られ、とりわけ Orbecche を皮きりに全部で9篇の悲劇を書いた悲劇理論の実践者として最も知られており、悲劇の多くは実際に上演されたとされていて、その方面からの研究も多い。ほかに8行詩の詩篇「エルコレ (Ercole=ヘラクレス)」(1557年に一部を刊行)や田園風寓話「エグレ (Egle)」等の創作も残した。以上の記述はほとんど『イタリア文学批評辞典』その他からの受け売りに過ぎないのだが、同じフェルラーラの宮廷を基盤にイタリア文学を代表する成果を残した Ariosto から Guarini や Tasso につながる系譜の重要な環の一つであったことは確実である。とりわけ Guarini (1538-1612) の非喜劇の理論や非喜劇「パストル・フィードー」の創作等の活動とはかなりの部分で重なっていて、その先駆者だと言っても過言ではあるまい。Ariosto, Giraldi, Guarini, Tasso と一連の頂点を眺める時、中型都市フェルラーラのエステ家の宮廷の知的生産性の高さは文句なしに感嘆に値するが、そうした優れた伝統の伝達者としても Giraldi の存在は重

要である。

Giraldi がノヴェッラを書き始めた1528年とされている。その真偽はともかく、ノヴェッラ集の額縁の着想が生まれたのは、そこに記された「ローマ荒掠」が生じた1527年から余り遠くない時期だった、と考えると差し支えあるまい。また大抵の悲劇はノヴェッラを下敷きにしているとされているのと、ノヴェッラとしての完成度はそれほど高くなく、彫琢の跡があまり認められず、時には記述に矛盾すら見出されるという事実から考えると、ノヴェッラ内の幾篇かは当初劇作品のシノプシスとしてメモされていた可能性も考えられる。いずれにしても長い期間にわたって書き溜められて来たもので、もしも彼の運命を一変させた失脚と亡命がおこらず、宮廷生活が順調に過ぎて行ったならば、『百物語』は完成しなかったか、あるいは逆にもっと完成度の高いノヴェッラ集として残された可能性が高いのではないだろうか。しかし運命の激変は彼にこの作品の素早い仕上げを命じた。すなわち1565年、フェルラーラの宮廷を去った僅か2年後に、彼がピエモンテの新設大学に職を得た Mondovì の印刷所から、このノヴェッラ集の初版本を刊行している。後に見るとおり献辞の相手の6割以上がサヴォイア宮廷の関係者であるという事実からも、彼が新しい宮廷の人々に理解されやすい業績を提出する必要に迫られていたことが推察し得る。そのためにこの作品は今日見るような、やや混乱したノヴェッラの集合体に止まらねばならなかった。外枠や額縁が物々しく量的にも過大なのも、個々のノヴェッラ自体の完成度の低さやオリジナリティの乏しさを補うための窮余の手段だった、と見なすことが妥当であるようだ。なおたとえば結婚歴の有無等彼の私生活を知ることは、この作品の主要テーマから考えて重要であると思われるのだが、我々が入手できた資料ではそうした事実に関する記述は皆無に近く、マイナーな作者の通例だとはいえ、かなり片手落ちの紹介しか出来なかった事は遺憾である。

第二節 ノヴェッラの舞台設定と登場人物の階層

これまで筆者はノヴェッラ集の紹介を行う度に、各作品の中でいかなる時代といかなる場所がその舞台として用いられ、また登場人物は主にどういう人々であったかを簡単に眺めるのが通例であった。その例にならってまず各作品の時代と場所を簡単に数字で表すと、以下のような結果が得られる。ただしエピソードの類は省略し、序文の中に10話、第三日の後に1話、第五日の後に2話あるとして計113話とし、さらにⅦ-2のみ2話から成るとして、総件数は114として計算しておく。他にもこれに劣らず妥当な数え方は有り得るだろう。

時 代

記入なし、または不明	56 (49.1%)
同時代または近年	10 (8.8%)
16世紀	21 (18.4%)
15世紀 (内後半と分かるもの7=6.1%)	12 (10.5%)

14世紀	2 (1.9%)
遠い昔、ずっと昔	2 (1.9%)
古代	11 (10.6%)

以上の数字から分かることは、作者の時代的背景に対する関心の薄さである。記入なしが圧倒的に多いということは、そうしたことを記す必要を全く感じていないために他ならない。残りの半数以上を16世紀と同時代または近年で占めているが、古代も意外に多い。しかしその古代も歴史的な意味はあまりない、と言える。すべての時代を通じて人間は同じ価値判断を行い、同じように振る舞っているという印象が否み難い。これはまさに演劇やオペラの舞台に流れている透明で抽象的な時間に他ならない。中世が意外に少ないのは、古代よりも同時代との差異が鮮明に意識されて抽象性が低いために、作者によって敬遠されたためではないかと思われる。やはりこの作者は基本的に劇作家であって、勿論多少の例外はあるとしても、時代の個性に執着する年代記や歴史の世界の対極に位置していると思し得るだろう。

舞台として選ばれている場所に関しても、明らかに時代の場合と同様の抽象性と普遍性が感じられるようである。ただ興味深いのは、時代の場合とは一変して、少なくとも従来のノヴェッラに比して、はるかに広大な範囲を舞台に選んでいるという事実である。しかしこの時代にヨーロッパ人の眼前に一挙に広がりつつあった新世界については何一つ関心が払われておらず、ただ地中海世界を古代の水準に拡大しているにすぎず、あくまでその視線は後ろ向きである。具体的に示すと、以下のとおりである。

舞台となった地名

記入なし	3 (2.6%)
単独で舞台となる場所(複数回現れるもののみ記録。ヴェネツィア他23箇所を省略)	
イタリア国内	62 (54.4%)
イモラ	2
サレルノ	3
ナポリ	4
フェレンツェ	3
フェルラーラ	9 (7.9%)
フェルラーラの領域	1
マントヴァ	2
ミラノ	2
リミニ	2
ローマ	11 (9.6%)

複数でイタリアと国内または外国に関連する地名 12 (10.5%)

ヴェネツィアーキプロス	1
ジェノヴァーチュニス	1
ナポリーフェルラーラ	1
ナポリーラグーザー-Velonaーパトラス	1
ファーノーナポリースペイン	1
ラヴェンナーヴェネツィアーチュニスーローマ	1
ラヴェンナーパヴィーア	1
ラヴェンナーローマ	1
レッジョーボローニャーフィレンツェ	1
ローマーオルヴィエート	1
カルタゴーシチリア	1
ヌミディアーシチリアーリスボン	1

単独の外国地名(複数回のもののみ記録) 31 (27.2%)

マケドニア	2
スパルタ	2
コンスタンティノーブル	3

複数の外国地名 6 (5.3%)

ブダペストーウィーン	1
マラトナーコリント	1
トラキアーマケドニア	1
チュニスーバビロニアーダマスカス	1
エジプトーペルシャ	1
ペルシャーアルメニア	1

大幅な省略を行ったが以上のリストによっても、いかに古代の地中海世界の地名が採用されているかが理解していただけるであろう。しかし作者はそれぞれの土地の個性に対しては何の関心も示さない。その代わり異教徒に対する差別感情も希薄で、後に示す Orbecche の父のような残酷な君主はむしろ例外で、II-6 や V-7 のチュニス王の様に寛大な君主の方が普通である。ほとんど唯一の例外は IV-10 のユダヤ人の金貸しへの嘲笑だが、その場合ですらそれほど残酷な筆致ではない。むしろ序の 7 の不潔なドイツ人の富豪に対する憎悪と差別感の方がはるかに強烈な印象を与え、作者はローマの荒掠に個人的な関係があったのかも知れないとすら感じさせる。反

動宗教改革という、異教徒に対して苛酷になった時代という印象が強いが、この作品から見る限り、反プロテスタント感情の方が生々しいようである。

続いて登場人物の階層を簡単に眺めると、この点だけは伝統的なノヴェッラ集に比して極めて特異な数字が現れる。従来通り貴族をN、民衆をP、聖職者をRで示す。

Pのみ	33 (28.9%)
Nのみ	25 (21.9%)
Rのみ	1 (0.9%)
P+N	52 (45.6%)
P+R	2 (1.8%)
R+N	1 (0.9%)

以上の数字においてもったも目立つのは、聖職者の比率がノヴェッラの伝統から見て著しく低い、という事実である。ただし我々はすでに Parabosco の『気晴らし』において、わずか17篇のノヴェッラに関してではあるが、さらに極端な聖職者離れと貴族化を見た³⁾ので、大袈裟に騒ぐ気にはなれないかも知れない。この問題については、第四章でまとめて考えることにして、作品の舞台についてはこの程度に止めたい。

第二章 『百物語』の構成

第一節 作品の構成要素

すでに少し触れた通り、この作品の文学的評価は必ずしも高いとは言えないが、多くの重要な問題を含んでいることは否定し難いものと思われる。そうした問題の一つにこの作品の構成の問題がある。何故ならノヴェッラ集の発展史に関連して、16世紀にはトスカーナの文学者達を中心に、ボッカッチョの『デカメロン』型の額縁が復活して大いに流行したという事実についてすでに私は論じた⁴⁾ことがあるが、本作品こそそうした額縁の最も発達した形態に達していると言っても過言ではないからである。また私は作品をまとめている枠組について、献辞や序文の部分を外枠と呼び、ノヴェッラの語り手達の状況を説明する額縁の部分と区別したが、その外枠の部分も結構複雑な内容を有していて無視し得ないものと思われる。こうした枠組の重さが、純粹にノヴェッラだけを楽しもうとする人々に好ましい印象を与えたとは考え難いけれども、少なくとも作者自身とこの時代の心性を知る上での手掛かりであることは確実である。

まず我が国では作品そのものに接することが極めて困難だという事情を考慮して、作品の構成を客観的に把握することから始める。1565年ピエモンテ州の Cuneo 県 Mondovi (初版本では

Monte Regale と記される) で Lionardo Torrentino によって刊行された初版本ではなくて、その翌年ヴェネツィアで Girolamo Scotto によって刊行された版によっていることをあらかじめ断っておきたい。初版本(2巻本)は少数刊行されたらしく書誌学者 B. Gamba は1835年刊行の『散文イタリア・ノヴェッラ書誌』の中で、その完本は極めて稀になっていて英、仏両国で100~140フランの高値を呼んでいると記している⁵⁾。なお Gamba によると再版と初版との違いは、再版の方がはるかに校正が優れて誤りが少ないことと初版の第二巻の末尾に付けられていた同時代の男女の著名人を称えた長い章が省略されていることだとされている。同じく Gamba によると作者の生前に刊行されたのはこの二つの版であったが、その後1574年に恐らく作者が死んで刊行し易くなったために第三版、1580年に第四版、1584年に第五版、1593年に第六版が(第五版は印刷所が不明らしいが)それぞれ別の印刷所から刊行されているようで、1608年にはやはりヴェネツィアで第七版が刊行され、当時はかなりの人気作者だったと見なしうるであろう。だがすでに見たとおり、それ以後はアンソロジーに一部収録されるだけの作家となった。第三版以下は作者の没後の刊行なので当然献辞の部分はさらに削除されたいが、第二版は生前に作者の了解の下で、初版よりも丁寧に準備された版らしいので、一種の完成稿と見なし得るのではないだろうか。なお、1834年には献辞の類を全て削除した版が刊行⁶⁾されているという。いずれにしても150年のブランクが存在する。以下でその内容を順次列挙し、特に問題を含む部分のみ次節で扱う。

第一部 タイトルと扉の絵。

副異端審問官 S. Marcus Cigliarius の出版許可証。(SはSignorの略)

(5 ページにわたる) サヴォイア公 S. Emmanuele Philiberto への献辞(日付は1565年6月14日なので初版と同じもの。その中で優れた君主の業績は文学者の力で後世に残されんとする)。

(2 ページにわたる) トリーノ大司教 Monsignor Girolamo Rovere への献辞(結婚の信義について記したとする)。

(6 ページにわたる) 前半第五日までのノヴェッラの要約(ただしこれを読んだだけでは内容はほとんど見当がつかない。これまで筆者が要約を行ったすべてのノヴェッラ集について同じことが言える。なまじ作品集に短い要約がついている場合、作品の要約は極めて簡単な作業のように誤解されやすいが、筆者の経験では、常に作品自体から要約しない限り理解し難かった。作品に付けられたイタリア語の要約は目次程度にしか役立たず、たとえば読んで笑えるようなものとは程遠いのである)。

(ここから第1ページがはじまる。以下12ページまで)「フェルラーラの貴族 M. Giovan Battista Gyraldi Cinthio の GLI HECA TOMMITHI がはじまる。それは高貴な男女の団によって彼らの旅行中に語られた100の出来事である」というタイトルを付けて語られている、なぜそうした旅行がなされたかという、この作品の額縁の部分である。その内容は後に紹介するが、各行が90ドットで各ページ43行の大判の書物で正味12ページにおよぶ額縁は、少なくとも量的に

は元祖ボッカッチョのそれを上回る大袈裟なものであったことが了解される筈である。しかし額縁自体は、一応は入れ子箱式であるとはいえ、『アラビアン・ナイト』や『七賢人の書』のようにそれ自体物語の有機的展開を伴った狭義の入れ子箱式ではない点で、あくまでボッカッチョの伝統に対して忠実である。しかも同一の10人ずつ(計20人)の男女(ボッカッチョでは男3人と女7人に対し Giraldi では男女半々となっているが)が交替で話し合うという形式も、同時代の Erizzo 同様『デカメロン』の形式を忠実に継承している。

(13~36ページ)「gli Hecatommithi の序文が始まる。そこで人間の愛の中夫と妻の間の愛にのみ平穏があり、不正な愛には安息はありえないことが証明される」というタイトルが付けられた額縁の続き。人々の対話の中でしばしば本書の最大のテーマとされる夫婦の愛の賛美がなされる。

(37~109ページ)「恥知らずな女達に対する若者達の不正な愛について、gli Hecatommithi の序文のための10のノヴェッラが始まる」というタイトルで、主に娼婦との関係を扱い、前の序文を裏付けるためのノヴェッラが語られ、カンツォーネとリーメが歌われる。以下様々な種類の詩は、楽器の伴奏付きで歌われている。

(110~180ページ) 2 ページの献辞。日毎の献辞の相手については次節でまとめて考案する。タイトルは「各自がとりわけ気に入りの出来事について語る gli Hecatommithi の最初の十話」で、その後10人の語り手によって10のノヴェッラが語られる。以下もほぼ同様なのでタイトルに止める。カンツォーネの後、以後五日間のテーマが決められ、ソネットが歌われる。

(181~269ページ) 1 ページの献辞。タイトルは「ひそかに、あるいは目上の人々の意向に反して愛して、幸福な、あるいは不幸な結果を得た人々について語られる gli Hecatommithi の第二の十話」。2つのカンツォーネ。

(270~345ページ) 1 ページの献辞。タイトルは「夫と妻の不実が語られる gli Hecatommithi の第三の十話」。この十話の後 Flaminio によって夫を騙して二人の生徒と関係し続けた教師の妻の話が語られる(計11話ともいえる)。2つのカンツォーネ。後のカンツォーネは二人で歌われる。

(346~416ページ) 1 ページの献辞。タイトルは「他人を罠にかけて得をしようとして彼らの邪悪さにふさわしい結果に達した人々について語られる gli Hecatommithi の第四の十話」。リーメとカンツォーネ。

(417~500ページ) 2 ページの献辞。タイトルは「夫と妻の誠実さについて語られる gli Hecatommithi の第五の十話」。この十話の後、ジェノヴァの郊外の泉の白と黒の大理石像をめぐる女の不正とその像の由来と、ピストイアの夫の妻に対する信頼の愚かさを友人が死神に化けて暴露するという話が追加して語られる(計12話または13話)。3つのカンツォーネ。(以上で第一部が終る。第一部に収録されたノヴェッラは教え方にもよるが63または64。伝統的には第一部63、第二部50、計113話とされている。本論では一応第三日でプラス1、第五日でプラス2として計算しておく。ただし他の箇所でも別のノヴェッラを発見したり、さらに別の教え方を行うこと

もあるいは可能かも知れない。)

第二部 タイトルと扉の絵(顔と長い尾は多少獅子にも似ているが、足や胴は馬やラクダに似た瘦せた有翼の動物を、女の首を両方から支える二人の有翼の婦人(上半分)と足はカモシカの角で上半身は鬼面らしきものを付けた男性二人(下半分)が取り囲む第一部の扉と同じもの。初版の子象を月桂冠が取り囲む扉絵の方が単純だが品位があったようである)。なお第一部のタイトルに「市民生活についての三つの対話が含まれる」という一行が追加されている。

出版許可証(第一部と同じ)。

(3 ページにわたる) フェルラーラ公爵 Alfonso II への献辞。

(5 ページにわたる) 第二部の要約。

(1 ページの) 市民生活についての第一の対話の献辞。

(ここで第1ページが始まる。)(1~36ページ) タイトルは「市民生活において子供を育て、教育することについての第一の対話」⁷⁾。さらに「語っている人物はローマの紳士 Fabio, Lelio, および Torquato とジェノヴァの貴族 S. Gianettino d' Oria」の三行が追加されている。対話の最後にカンツォーネが1つ歌われる。

(37~69ページ) 2 ページの献辞。タイトルは「第一の対話で語ったのと同じ対話者による市民生活についての第二の対話」。カンツォーネ1つ。

(70~137ページ) 献辞なしで第三の対話。タイトルは「市民生活についての第三の対話。対話者は他の対話で語ったのと同人物」とされている。最後に2つのカンツォーネ。

(138~197ページ) 1 ページの献辞。タイトルは「礼節(cortesia)の行為が語られる gli Hecatommithi の第六の十話」。カンツォーネ1つ。

(198~226ページ) 1 ページの献辞。タイトルは「噛みつくため、噛み返すため、または危険や恥辱を避けるための様々な皮肉やその他の言葉やとっさに用いられた返答が語られる gli Hecatommithi の第七の十話」。カンツォーネ1つ。

(227~299ページ) 2 ページの献辞。タイトルは「忘恩について語られる gli Hecatommithi の第八の十話」。カンツォーネ1つ。

(300~372ページ) 1 ページの献辞。タイトルは「人間の事件の多様さと運命の偶然とが語られる gli Hecatommithi の第九の十話」。第九話中にカンツォーネ1つと最後にカンツォーネ1つ。

(373~464ページ) 1 ページの献辞。タイトルは「騎士道の行為およびそれに属する事柄が語られる gli Hecatommithi 第十の十話」。カンツォーネ2つ。(以上で第二部は終る。この作者にしてはやや唐突な終り方だが、すでに見たとおり初版に見られた人物談義を含む最後の章が削除されているためである。ノヴェッラ集としてはこれで十分である。)

第二節 作品の外枠および額縁について

やはり何と言っても本作品においては、イタリア・ノヴェッラ史上の一つの異色作と見なし得

る額縁が最も大きな問題を含んでいるようであるが、外枠も決して馬鹿にはならない。少なくとも一連の献辞について全く触れないわけにはいけないので、それらの対象となっている人々を概観した後に、額縁に取り組むことにしたい。

第一部

S.Emmanuele Philiberto,Duca di Savoia, サヴォイア公 (敬称一部省略、S.はSignorの略)

Monsignor Girolamo Rovere,Arcivescovo di Torino, トリーノ大司教

第一日 S.Thomaso Langusco,Conte di Stroppiana,Consigliere di stato,e gran Cancelliere del Serenissimo Duca di Savoia, ストロッピーーナ伯爵、サヴォイア国家顧問官

第二日 Cardinale S.Donno Alvigi da Este, エステ家枢機卿

第三日 Signora Laura Eustochia da Este, エステ家貴婦人

第四日 Magnifico Presidente S.Casciano dal Pozzo, 法律家

第五日 Madama Margherita di Francia,Duchessa di Savoia, サヴォイア公妃

第二部

Duca di Ferrara,S.Donno Alfonso secondo da Este, フェルラーラ公

第一の対話 Principe di Piemonte =サヴォイア公

第二の対話 S.Giovanni Andrea d' Oria, Marchese di Torsi, 後著名となるジェノヴァ提督

第三の対話 なし

第六日 S.Donno Francesco da Este, Marchese da Massa, エステ家のマッサ侯

第七日 S.Carlo, Conte di Lucerna, Consigliere di stato del Serenissimo Duca di Savoia, Governatore del Monte Regale, e dello studio Riformatore, ルチェルナ伯、サヴォイア国家顧問官

第八日 S.Lucio Paganucci, supremo Segretario del S.Duca di Ferrara, フェルラーラ書記官長

第九日 S.Antonio Maria Savoia, Conte di Collegno e Maggiordomo maggiore del Serenissimo Duca di Savoia, コッレーニョ伯、サヴォイア公家執事長

第十日 S.Donno Alfonso da Este, Duca di Ferrara, フェルラーラ公

以上通算15人の内でサヴォイア公とフェルラーラ公はトップと最後の位置を占め、しかもいずれも2度ずつ登場し、いわば主役の地位を2人で分けあっているといえる。実質13人の内S.Casciano dal Pozzoだけは文面から法律関係者らしいことは分かるが、その正体がよく分からない。残る12人の内で、サヴォイア家関係者は5人(その内公夫妻のみが主家の人々)、エステ家の関係者は5人(内女性1人を含む4人が主家の人々)、大貴族出身のトリリーノ大司教は勿論だが、ジェノヴァの大貴族もどちらかと言えばサヴォイア家に近いようで、やはり作者を大学に迎えてくれたサヴォイア家宮廷を主たる対象に据えているが、エステ家の比率も決して低くはない。作者はその宮廷から追われて一度はフェルラーラから去ったものの、エステ家の人々を

通して故郷との関係を保持し続けたことが分かる。しかし長年書き続けて来たノヴェッラ集を寄留先の領主とその家来達に丁重な献辞を添えて献呈しているという事実から、年老いて国を追われたこの時代の文学者の淋しい実態が想像し得る。

次にいよいよ問題の額縁を眺めることにしよう。1ページから13ページにわたる額縁設定の部分は、まず人間の運命の不安定さと無常を認め、しかしそのお陰で変化による喜びや悲しみが生じるのだと説く言葉から始まる。続いて運命の悪戯で一団の人々が長期にわたる船旅に出て、退屈しのぎにお喋りを楽しんだことを記し、何故そういう状況が生じたかが語られる。それは1527年にドイツの一君主が法王を憎んだことに端を発したとされ、君主は法王を殺害することを目指し、ルターの影響を受けて法王とローマとを憎んでいる軍隊を送り込む。ところが総大将がサン・ピエトロの郊外で城壁を越えようとしていた時、火縄銃の弾丸に当たり即死。彼は死の直前に勝利を約束したためにかえって士気が高まり、大将の死の復讐のためにローマ市内に乱入、Furio Camillo をリーダーとする一軍がカンピドーリオの丘にこもって抵抗した他は、全市はほとんど敵の軍隊に蹂躪され、法王は高位聖職者の一群と共にサンタンジェロ城に閉じこもった。法王を捕えそこねた敵の軍隊は、当然「家屋に侵入してそこで見出したあらゆるものを奪った」上に、捕えた主人に「ありとあらゆる種類の残酷な拷問を加えて」隠しているものを奪った。また「捕虜として縛り上げた家族の父や男達の面前で彼らの妻達に暴行を加え」、「夫は妻が名誉を奪われ、父は娘が、叔父は姪が、兄は妹が犯されるのを見ながら、行為によって助けることはおろか、彼らの不幸を泣くことすら許されなかった」（以上一連の引用はp. 5）。そうした事態を恐れて「真にローマ的な精神の」父親は娘達を殺したし、妻達は「進んで自分の胸を露わにして、夫に刺し殺してくれるように頼んだ」。兵士達は尼僧院でも同様の悪事を働き、また教会や修道院の聖器類を容赦なく略奪し、また見るからに分別ありそうな権威ある老人を見かけると、これを捕えてローマ中を引き回して侮辱した（以上p. 6）。さらに兵士達は放火すると脅して人々を家から追い出して財産を奪い、さらに実際に放火や子供達の殺戮を行い、おまけに墓の中から死者まで引っ張り出して宝を探し、たとえば「法王達の指に莫大な価値のある指輪を見出した」（p. 9）。こうしてローマへ食糧を運んでいた人々が来なくなり、深刻な飢饉が発生して、人々は犬や猫や鼠までを食い尽くした。その結果悪疫が発生し、神の罰で兵士達も病気に罹り、また火薬の大爆発で大勢の兵士が死ぬが彼らは自暴自棄からさらに乱暴を働いた。実はこの事故はコロンナ家のある貴族の仕業だったが、その一族はFondi という場所に避難していたために無事だった。

同家のFondiの避難所には同家の人々だけでなく、他の市民達も避難していたが、一応ローマの混乱も収まったのでそこを立ち去ることになった。しかしそうした一団の長老Fabioがまだローマでは惨事のはとぼりが冷めておらず、死体のために空気が汚染されていて、兵士達も居残っている上に、飢饉と悪疫はひどく、いま帰っても仕方がないので、むしろ一同がまとまって船を雇い、マルセーユへ行行ってしばらく様子を見てはどうかという提案を行った。人々はその提

案に賛成し、船を用意してローマから出発することに決めた。

13ページ以下36ページまでの部分は、このノヴェッラ集の日毎のテーマのイントロダクションまたは基調演説とでもいえる部分である。約束したとおり一団の男女は夜明けと共にまだ混乱して騒音と死人に充ちたローマをあとにして出発し、Civitavecchia（現在はサルデーニャへの定期便が出ている）より2隻に乗船した。Di Franciaに従って⁸⁾一行が停泊した港を列挙すると以下の通りである。Talamone-Piombino-Vada-Livorno-Porto Venere-Genova-Savona（ここでは不注意のために二度下船している）-Nizza-Tolone-Marsiglia. なおこうした旅行の額縁はセルカンビにも見られたが、作者はセルカンビの場合以上に旅に関心がなく停泊地に関しては全然触れられていないので、旅行の面白さは全く感じられない。人々が食事を済ませて、そろそろ昼寝し始めたころ、後に語り手に加わる9人の若い男達が長老Fabioを誘ってよもやま話を始め、聖職者について若者達が語る疑問にFabioは丁寧に答えている内に、夫婦の間においてのみ平穏で安定した愛が成立し得るという、彼の持論が語られ、若者達が疑問や反論を述べ、若者の一人の提案で実例を示しながら話し合うことになり、娼婦の様々な手練手管やその害毒について男性のみで10人が語り合う。話しが終わり、一人がカンツォーネを歌い終ったころ、船はタラモーネに到着し、上陸して食事を取る。夕食後女達がどうして退屈を凌いだかと尋ね、翌日からは10人の女性も新たに仲間に加わることになる。ただし毎日男女5人ずつ100話語ることになる。

第三章 特に興味深いいくつかのノヴェッラについて

第一節 マイナーなノヴェッラの面白さ

すでに何度も記したとおり、ヨーロッパ文学史上資料としては重要であるにもかかわらず、我が国ではその全貌を知ることが困難であると同時にそのための労力も大きい作品なので、これまでは出来るだけ客観的に紹介するため、その構成や額縁を伝えて来た。さらに問題作や時代との関わりに関しても、すでにDi Francia等によって明らかにされていて、しかもこの作品を論じる場合には避けて通れないいくつかの事実や命題が存在しているので、それらの客観性の高い問題は次章で取り上げて本論のまとめに代えることにして、本章では日本人の一読者が通読した際の印象を率直に記して、本音に近い形で紹介を行って見たい。勿論筆者がこうした作品の読み手として決して上質とはいえないことは十分自覚しているのだが、ただ欧米の読者の受け売りだけでは無意味なので、あえて恥をさらしておきたい。

この作品に本当に面白い作品が含まれているのか、と問われた時、小さな出来事や少人数の関係を描いたものには結構面白い作品がある、と答えるつもりである。たとえば絶対に笑える作品をただ一点だけ上げよ、という注文に対しては、以下のようなファルスを紹介する。

第三日第九話(語り手 Celia, 以下同じ)(時代記入なし、フェルラーラ) 外国から雇われてやって来たフェルラーラ大学の教授が、家族と共に連れて来た15才のお手伝い Nigella が気に入り、100リラの持参金をやるから言うことを聞け、と口説いて少女に拒否される。それでも粉篩い部屋でパン粉を篩っていた彼女に、講義用の赤い服を着た教授がしつこく口説くので、Nigella は「近くに奥さんがいないかどうか見て来ますので、その間粉篩いを頼みます」と篩を預けて降りて行き、階下の奥さんに「今度粉篩いに来た下男を見て下さい」と連れて来る。粉篩いに熱中していた教授は、待っていた Nigella の代わりに奥さんが現れたので失神してしまう。奥さんは息を吹き返した教授に「あなた何時から女中の下男になったのよ」と油をしぼり、Nigella を身辺においては危険と見て、持参金100リラを与えて嫁にやった。

この作品は、『百物語』の中では例外的に切れの良いファルスで、U.T.E.T. 版の16世紀のノヴェッラのアンソロジー⁹⁾にも選ばれていることから、Giraldi のこの種の作品の最高傑作であるといっても過言ではない。これだけのファルスが書ければ、もっと他にもこうした作品が書けそうなものだが、残念ながら、ずっと劣った序の8、I-2 程度しか見当たらない。

序の8 (Flavio)(時代記入なし。ローマ) 貴族の娘 Linda は好色のため、娼婦に転落。殺し屋の恋人が彼女を独占したが、他の男との関係を禁じる。彼女は絹地の服が欲しくなり、恋人が留守の日に、ベルガモの絹商人に品物をもって来させる。商人が高級絹地を持って来たので、Linda は気に入り代金を身体で払う。後で高い品を与え過ぎたと思った商人は、殺し屋のいる時刻に彼女を訪ね、「昼間預けた商品を取りに来ました」と言って品物を返させた。殺し屋の嫉妬が怖いので Linda は品物を返すが、品物の中におき火を入れておいたため、商人の袋が焼けて、商人は大損害を受ける。商人は殺し屋が怖いので女に文句を言えなかった。

第一日第二話 (Massimo)(マラテスト家支配下のリミニ) 良家の娘 Vana は美男の若者と結婚したが、浮気な性質は直らない。七月に田舎の別荘に出掛けると、小麦の脱穀に疲れ木陰で眠っている農夫の一物が膨れていることに着目。夫が市内に戻り、農夫の妻が妹のお産の世話に10マイル離れた村へ行った夜、Vana は農夫に別荘の用事を言い付け、その時ふざけて挑発した。農夫も秘密を誓って Vana と三度以上楽しむ。二人が寝てしまった夜中、夫が戻って来て戸を叩く。出口が一つしかないため妻は男を櫃の中に隠して夫を迎え入れる。夫は町に向かう途中友人が兄弟喧嘩を始めて手間取り、城門が閉じられていたのだと説明した。妻が夫の給仕をしていると、農夫が櫃の中で大鼾をかき始めたため夫が不審に思い、櫃の中の農夫を発見する。妻は「この男は夜中に私を殺すために忍び込んだのよ」と喚き、逃げ出した農夫に殴られて倒れるふりをして夫の注意を引いて、農夫を逃走させた。妻は夫が農夫を追っている隙に、農夫の斧を櫃の中に投げ込んでおき、後でそれを夫に見せて、農夫が自分を殺すつもりだったと信じ込ませる。翌朝夫

がりミニのボデスタに訴えに出掛けた後、農夫が抗議に来たので、金貨数フィオーリーノを与えて故郷に逃げ戻るよう勧めた。農夫は満足して別れの一発を楽しんだ後、故郷ルニジャーナへ帰郷。夫は妻の身持ちの良さを信じ続けた。

いずれもイタリア・ノヴェッラの古来の伝統を受け継いだファルスなので、一応の水準には達しているが、歯切れが悪くて最初挙げた作品の水準には達していない。Giraldi はあまりこの種の才能には恵まれていなかったらしく、そのことは当意即妙の返答や行動を扱った第七日にあまり優れた作品が見当たらず、古来よく知られたダンテの皮肉をそのまま採り入れていることから想像出来る。第七日目で一応水準には達していると思われるのは以下の3例位である。

第七日第一話 (Quinto) (16世紀前半、地名をわざと隠す) Giovanni da Castel Bolognese はある大領主に金メダル彫刻を頼まれて完成した。領主は自分のとても瘦せた姿が気に入らず、若い人々がそれを見て皆誉めるので、翌日彫刻家と二人きりで会い、作品にいろいろと注文を付けてもう一つ作らせた。代金を好きなだけ払うというので、彫刻家は「お金よりこれが私の作品だと言わないで下さい」と答えたので、領主は自分の誤りに気付く。彫刻家は人に二つのメダルのコピーを見せ、一つは自分が作り、もう一つは領主が作ったと言った。

第七日第五話 (Massimo) (Clemente VIIのローマ) 高位聖職者 Giovio は法王 Clemente に重用されるが、同僚 Celio Calcagnini と仲が悪く、Giovio の質問に Celio が素っ気なく答えたことから、Celio を非難し始める。Giovio が魚の本を出し Siluro (シビレエイ) は Storione (チョウザメ) だと記したので、人々は疑問を唱える。Giovio が人々の間で評判の Celio の学識に疑問の言葉を唱えた時、Celio が「それは Siluro が Storione かどうかというのとはまた別の疑問ですね」と言ったので、Giovio は黙ってしまう。

第七日第七話 (Curtio) (時代記入なし、ローマ) 浪費家には中庸が吝嗇に見えるようだ。市民 Sergio は父から大きな遺産を受け取ったが、賭博、色事、宴会等で使い果たし、友人の招待も減って来る。正直な儉約家 Marcello が広場で果物を買っていると、Sergio が近付いて、「そんなに使って破産しないようにしなさいよ」とその儉約ぶりを皮肉ると、Marcello が「ああ Sergio さん、まだ間に合う間にあなたにそう言ってやれなくて残念でした」と答え、Sergio は自分の惨めさを思い知った。

以上はいずれもインテリ同士の冗談であって、あまり庶民に親しみ易いものではなさそうだ。またこの作者にはセルカンビ等にしばしば見られる、まさに世間話の面白さというべき作品も乏しい。だがマイナーな作品の中で筆者の興味をそそるのは、こうした一応まとまりのあるファル

スやモッティ（当意即妙の言葉）系の作品だけではなく、一見なんのために書かれたか、その意図すらはつきり捕え難い、変化が乏しく単調な作品に意外に印象深いものが多いように思われる。これはあるいは単に自然主義以来のリアリズムの伝統が強い近代日本文学の洗礼を受けて育った一日本人の偏見に過ぎないかもしれないが、たとえば要約してしまうと面白くない以下のような作品が、読んでいると結構説得力を持っている。

第十日第三話（Aulo）（Alfonso I d' Este のモデナ） 愛し合っている夫婦が一人の青年と親しくしていた。夫婦が青年とあまり親しくしているので、夫の弟が嫂と青年の関係を怪しむ。弟は武芸に優れ勇名が高いので、広場で青年に会った時少し離れたところで話し合う。弟が兄のみならず、自分の名誉まで汚されていると言ったので、青年は武器に手を掛けそうになるが、我慢して忍耐強く見事に説得、親友の弟とも親しい友人となった。

この話などは要約してしまうと全く何の面白さもないが、丹念に全文をたどると、二人の男のやり取りには迫力がこもっている。もう少し変化が加わると次のような話となる。

第五日第三話（Horatia）（近年、コンスタンチノーブルの Pera） 青年 Calisto がギリシャの娘 Philotima と結婚、仲良く暮らしていた。ある時結婚式に招待され、妻が前に座った青年に一目惚れしてしまう。夫は青年と親しくなり、度々家に招く。妻が避けたがるので夫は新しく友となった青年を誉め、妻はますます悩んで病気になる。青年が夫の求めに応じて、歌を歌って慰めると、病状は一層悪化する。妻は夫に対して、あなたが青年を家に招いたのは誤りだったと言いのこして死んだ。

いずれもとりとめなくつまらないエピソードのようであるが、読んで見ると一応読ませるだけでなく、奇妙に魅力のある読物になっていることだけは確かである。これらの一見取るに足りない物語は、後に紹介する波瀾万状の物語とさして変わりのない紙数を費やして書かれているので、当然描写が緻密になり、多少退屈にはなっても、やはり完成度が高いという印象を与えるのかも知れない。しかしこれらのノヴェッラの持つ魅力は単にそれだけではなくて、やはり多少は理由があるもののように思われる。たとえば二番目に挙げた V-3 のノヴェッラの場合、主人公の女は自分からは何も行動を起こさず、ただ憔悴して死んでしまう。夫が行った配慮はすべて裏目に出て、相手の青年も何が生じていたのか全く知らない。妻は誰にも理解されない悩みをひたすら耐えて死んで行く。本人にとって何の酬いももたらされない空しい苦悩を、象徴的ともいえる程の単純さで描いている点では、イタリア・ノヴェッラが達した一つの到達点と見なし得るのではないか。勿論若い娘の恋患いのテーマはノヴェッラの伝統的なものではあるが、何らかの解決策が与えられるそうした寓話風の世界からは程遠く、しかも単に憐憫をそそるためだけに書かれ

ているのではなくて、人間の運命の奇妙さに対する一つの証言となっている。たとえば作者がその献辞や序文の類いで記している言葉を余りにも真に受けるのは、近現代のみならず、ルネサンス期においても、誤解を招くのではないだろうか。確かにGiraldiはトレント宗教会議の同時代に生きて、当時の権力者の方針にひたすら柔順であった。しかしむしろそれゆえに彼が書き残した作品の中には、この時代を考えるためのヒントが、結構数多く秘められているのではないか。以上の二つの作品はこれまで誰も注目しなかったのだが、少なくとも私には、むしろこうした動きの少ない、ノヴェッラとしてはモチーフを捕え難いような作品が、意外に興味深くまた問題を抱えているように思われる。さらに3つの例を挙げると、

第五日第九話 (Celia) (時代記入なし、ギリシャのSicione) 若い貴族 Partheneo が貴族の娘 Nicira と結婚。好色な貴婦人 Pognira が Partheneo に惚れ込んで誘惑する。彼が妻との信義を理由に相手にしないので、Pognira は彼の妻も浮気すると言い、否定する Partheneo を隣室に隠して Nicira を招き浮気を勧めるが彼女は同意しない。再度同じ条件で彼女を招き、彼女を恋する美男の宝石商に宝石箱を贈らせて甘い言葉で誘惑させたが、Nicira は贈り物を断った。隣室にいた夫は妻の貞淑さに感謝し、Pognira は夫妻に感化され貞潔になった。

第三日第八話 (Virginia) (時代記入なし、メッシーナ) 騎士 Valiero は貴族の娘 Licoride と結婚し愛し合っていたが、ある夜色白の肥った女中 Nepa が子持ちの雌犬と雌猫が仲良くしていると騒ぐので見に行き、不図したことから Nepa と関係した。偶然それを目撃した妻は、夫の外出後夫の従者に Nepa の首を切れと命じ、泣いて謝る Nepa に対して直ちに従者に連れられてパレルモへ去れ、と命じた。帰宅した夫は妻から Nepa が家から出て行ったと聞き、翌朝戻った従者から全てのいきさつを聞いて以後一切浮気を断った。

第三日第四話 (Livia) (時代記入なし、ラグーザ) 貴族 Adorno は親戚や友人の勧めで Calonia と結婚して熱愛したが、Calonia は退屈して若い男が気に入り、自分の乳母と相談する。乳母が止めるよう忠告すると、かえって熱が高まる。乳母は困って彼女の夫の Adorno と相談すると、Adorno は乳母に命じて彼女の恋人に思いを伝えたと妻に信じさせ、8日間麦刈りの監督に行くと呼び一度は家から出発した後、恋人に化けて妻の寝室に忍び込み一緒に寝た後、正体を現し、驚く妻を諭した後に許す。その後妻は夫に対して生涯貞節を守った。

いずれもとりとめない話ではあるが、大したことは何も起こらないという点では共通している。すでに記したとおりその点こそ評価すべきであり、そしてたとえば最初の話では、宝石の贈り物を極めて重大な試練として描いている点や、二番目の話の若い奥方の怖さなど結構興味深く、実際に読んで見ると作者が宣伝している程為になるとは言えないが、一応読ませる。確かに作者が

序文でも断っているとおりに、そしてこれらの物語に添えられた教訓が教えているとおりに、この作者はひたすら教会が勧める夫婦の愛の奨励者であり、体制の擁護者である。しかし実際に物語から透けて見えるのは、制約の中でも精一杯生を楽しんでいる男達や貴夫人達の姿に他ならない。再封建化の時代等といっても、ここに描かれている夫婦の関係は、近代人のそれに近いのではないか。

第二節 巡り遭いと救出と妄執

前節で行った本作品への主観的アプローチをさらにすすめ、メジャーな作品についても簡単に考察しておく。誰が読んでも一目で気付くとおりに、巡り遭いと救出とは、単独もしくは重複した形で、メジャーな喜劇的ノヴェッラにおいてはほとんど必ずと言えるほど頻繁に現れるテーマであって、特に巡り遭いは Giralaldi がそれなしでは喜劇は成り立たないと理論的に考えていたテーマだとさえ言えそうである。当然各々のノヴェッラは変化に乏しく、よく似た筋書になり易く、評価も下がり勝ちになる。しかしそれらの作品が全くつまらないかと言えば、それなりに心を動かすものを持っていることは否定できない。たとえば今日我々が最も入手しやすい16世紀のノヴェッラのアンソロジー¹⁰⁾は、二点とも次の作品を収録している。だからこれこそこの作品の代表的ノヴェッラと見なすことも可能である。

第九日第一話 (Quinto) (時代記入なし、レッジョ、ボローニャ、フィレンツェ、ラヴェンナ)

レッジョの Tognaccio と Bertuccia 夫婦は子供に厳しい。14～5才の Chrisante と 8～10才の Alberto の兄弟は何かを買いにやらされ、お金を落としたので家出してしまう。日が暮れて後悔するが、市の門は閉まっていた。二人は山賊につかまり、兄は仲間に加えられ、弟は頭目の娘の執り成しで助命されるが、酒樽に詰め込まれる。山賊達はボローニャでつかまり処刑されるが、兄と頭目の娘は台所にいて助かる。兄は13～4才のその娘のお金を持参金にして彼女と結婚、そのお金を資本にして絹商人となる。弟はオオカミに襲われるが樽の中で尾をつかむとオオカミは楡の木に頭をぶっつけて死ぬ。樽がこわれたところへ騎士の一家が来て、彼を息子の学友として郷里のラヴェンナに連れ戻って教育を与える。フィレンツェにレッジョの貴族達が来た時、兄が両親のことを尋ねに来て身の上や弟を失ったことを語る。その直後ピサに哲学を勉強に来た弟が同じ貴族達にレッジョのことを尋ね、絹商人の事を聞かされ、翌日商人の振りをして兄を訪ねる。兄は彼に見覚えがあると言い、二人は再会を喜び身の上を語り合う。兄は山賊の娘だった妻を紹介。一同は揃ってレッジョに戻り、10年後に再会した老いた両親に孝養を尽くした。

巡り遭いには今挙げた兄弟の再会（その後に家族のそれが続く）の他に、父と子、母と子、夫婦、婚約者または恋人同士、家族全員といった様々な組み合わせが考えられるが、これらの全てがこの作品の中で見出され、まるで巡り遭い百科のような様相を示している。しかしそれらの中で最も効果を上げているのは、何故かアンソロジーで持て囃されている前記のノヴェッラよりも、

私には夫婦同士や婚約者同士の、あるいは家族全員の再会の中での夫婦の巡り遭いのように思われる。以下に2、3例を挙げよう。

第十日第五話 (Fulvia) (時代記入なし、ナポリ) 長い旅から戻った Alfonso Gravina は、郊外の別荘から妻 Eustathia への手紙を下男に託し、彼女を連れて来るように命じた。かねてより奥方に恋していた下男は、森の中で夫人を馬から降ろし、主人に彼女を殺せと命じられたと告げて、自分と一緒に逃げようと勧める。あくまで夫に貞節な夫人は、下男の申し出をはねつけ、むしろ夫の手で殺されたいという。下男は夫人を殺して思いを遂げようとしたが、夫人は傷付きながら大声で助けを求め、通り掛かったスペイン人騎士に助けられた。夫人から事情を聞いた騎士は、サレルノで夫人の傷を治療後、船でバルセロナに向かい、故郷トレドで夫人に自分の母親の世話をまかす。下男は夫人が死んだものと確信、主人には夫人の愛人らしいスペイン人の騎士と3人の仲間が現れて、彼女を連れて行ったと報告。それから3年後 Alfonso は下男を連れてトレドへ行く。Eustathia は騎士の母と教会へ行き夫を見る。彼女は騎士の母に事情を語り、身の潔白を明かすため夫を招待して欲しいと頼んだ。騎士の母は Alfonso の宿を探して招待する。質素な服を着て髪を肩まで伸ばした夫人は、夫を見るとその足元にひざまづき「何故あなたは、下男に殺せと命じる程私を憎んでいたのですか」と尋ねた。夫は妻を見て驚き、「そんな言い訳で不倫は隠せない。私から逃げてこんな所にいるとは」と怒り出し、そのまま立ち去ろうとしたが騎士の母に止められ、妻は下男のしたことを語り、首の傷を見せた。そこへ騎士が帰宅して、夫人殺しを下男に命じるような奴は許せないと騎士に決闘を挑戦し、夫の方も「人の女房を盗んでおいて何を言うか」と受けて立つが、下男を呼んで確かめることになる。皆が隠れている所で、Alfonso が下男に向かって夫人が立ち去った状況を尋ねると、下男はいつもの説明を繰り返すが突然夫人と騎士が現れると、驚いて彼らの前にひざまづきすべてを白状してしまう。主人は彼を殺そうとしたが、夫人は彼のお陰で潔白が証明されたのだからと、彼の命乞いをした。しかし天罰が下り、下男は帰途、海で溺れ死んだ。夫は再会した妻を終生大切にした。

第十日第四話 (Pontio) (時代記入なし、ギリシャ) Elide の青年 Philandro は Maratona の美しい娘 Sophronia と婚約して、20日後に親戚の人々と船でやって来るよう言い残して先に帰郷。2隻の海賊船が花嫁の船を襲い、花嫁と財産を奪って他の全員を殺す。海賊は花嫁を Malvagio という女衞に売り、彼は花嫁をコリントへ連れて行く。15〜6才の容姿も言葉も美しい娘はコリントの貴族の子弟の評判になり、Sophronia は彼らに頼んで操を守り続けたが、乱暴な軍人が無理に犯そうとしたので、彼の腰の剣を抜いて刺し殺す。軍人の従弟が娘を殺人罪で告発。無罪とする貴族の若者達と死刑を求める軍人達が対立し、危険を感じた領主は娘の処刑を急ぐ。噂を聞いて Philandro が駆け付け、獄中の Sophronia から事情を聞く。結局告発している軍人が彼の従弟であることや、彼の父がコリント防衛に功績があったことが判明して花嫁は釈

放され、幸福な夫婦となった。

第五日第七話 (Curtio) (16世紀初頭、ラヴェンナ、ヴェネツィア、チュニス、ジェノヴァ、ローマ) ラヴェンナがフランス軍の略奪を受け、貴族 Giglio Luchini の家屋は全壊して、父子は捕虜として連れ去られる。避難先から戻った夫人 Costanza は家族全員死んだと信じ、求婚者を断ってヴェネツィアの親戚の女の家へ逃れ、自分が死んだという噂を流す。夫は海上で海賊の戦利品としてチュニス王の奴隷に売られるが、その信任を得て二隻のジェノヴァの商人を助け、その船で王の宝を持って逃亡して、ローマにやって来る。4才の男子はジェノヴァ貴族 Lelio Spinola に売られ、子供のない Lelio の養子となり Gellio と名付けられる。5才の女の子はローマの名門貴族 Savelli 家の婦人に買われその養女 Aura として育てられる。Aura は成長して、Gellio と共にローマに来た Spinola 家の青年 Giulio と恋仲になるが、ラヴェンナに調べにやった下男から妻が死んだと聞いて、Luchini 家の血をたやさぬため結婚を考えた父 Giglio が亡き妻に似た娘との婚約話を進める。恋人の Giulio と Gellio は Giglio に闇討ちをかけ、返り討ちに遭い牢屋に閉じ込められる。この騒ぎの中で Giglio は Aura が Gellio を通して恋人の Giulio に送った真珠と金糸の財布を拾い、亡き妻 Costanza の持ち物なのでその出所を調べると、Aura と共に兵隊が売った品物であり、Aura は自分の娘だと悟る。さらに Gellio もラヴェンナ出身だと聞いて、右手の目印から自分の息子だと知る。他方ヴェネツィアで、同じ船に乗っていた商人達から、夫がチュニスから逃亡してローマにいることを聞いた Costanza は、ローマに来て一貴婦人に仲介を頼み、夫と同じ食卓で喪服姿で食事をする。夫は婦人が亡き妻に似ているので驚く。彼がそう言うのと貴婦人は寝室に案内、そこでさっきとは打って変わった明るい色の服を着た妻を見出して、再会を喜ぶ。夫は妻を喜ばせるため、牢屋から息子達を救い出し、さらに Aura をも紹介して一族は再会した。ジェノヴァやローマの養い親達も招いて、Giulio と Aura、Gellio とかねて恋仲の Savelli 家の娘との結婚式を上げ、その後一同は仲良くローマで暮らしたという。

以上の夫婦や婚約者の巡り遭いは、多少類型的で独自性に欠ける上に荒唐無稽だという非難も避け難いが、いずれにも先に挙げた兄弟の巡り遭いよりも、劇的な効果を上げていると言えるのではないだろうか。特に最後の二話は巡り遭いが救出と結び付いているために、一層劇的なものになっている。夫を牢屋から救い出す V-4 や V-5 のように、救出のテーマだけで成り立っているものもあるが、事情あって身を隠していた家族が突然現れて父や夫を救い出すというテーマは、Giraldi が好んで用いたもののようである。

第二日第五話 (16世紀教会支配下のイモラ) 貴族 Horatio の娘 Cicilia の美貌を聞いて、フォルリの美青年 Rinieri が彼女の家の香水屋の老女の手引で知り合い、秘密結婚で Cicilia は妊娠する。Horatio は怒り、以前の家来 Manigoldo 夫妻に娘の殺害を命じたが、家来の妻が哀れん

で逃してやり、Cicilia はレカナータの親切な老女の家で出産する。Rinieri はラヴェンナで Manigoldo の手紙を見付けて事情を推理し、Horatio を娘殺しの罪でローマの代官に告発する。Horatio がローマに連行され処刑される寸前、噂を伝え聞いて赤子連れでローマに来た Cicilia が処刑場に現れて父を救い、父と夫とを和解させた。

第三日第五話 (Sempronio) (時代記入なし、セヴィリア) 好色な貴族 Consalvo は Agata と結婚した後娼婦 Aselgia を愛し、妻を毒殺するため医学生と相談する。Agata を恋し交際を求めていた医学生は毒薬だと称して眠り薬を与え、埋葬された夫人を掘り出して求愛した。貞淑な夫人は拒否して身を隠す。Aselgia と再婚した Consalvo はその浮気を怒り、Agata を毒殺したことを口走る。Aselgia が Agata の親戚に伝え、Consalvo は告発されて死刑の宣告を受け、貞淑な妻を殺したことを後悔する。その処刑寸前に Agata が処刑場に現れて夫を救った。

残念ながら Giraldi の狙いは、もう少し後に現れる画家 Caravaggio のような優れた成果には到達していないが、その目指すところがこの時代の画家達の劇的な表現と似ていたことは、以上の例によっても推察し得る。こうした巡り遭いや救出のテーマが、喜劇の中心的テーマだとすれば、悲劇、喜劇のいずれにも常に見出されるのは、妄執に駆りたてられる人々である。すでにこれまでに示したノヴェッラにも妄執の虜達の姿が数多く現れるのを見た。その対象の大部分は娼婦や人妻や少女であるが、時には持参金や遺産等である。実は巡り遭いのテーマ自体、一度失ったものに対する執着と再発見なので、妄執のテーマと重なり合っていると言える。そのことを端的に示しているのが次のノヴェッラである。

第九日第三話 (Aulo) (時代記入なし、サレルノ) 貴族 Marino と妻 Placida は男子 Perpetuo (永久) を得たが、父は子供が2才の時死去。息子は12才の時熱病にかかる。母は夜明け毎にシロップを飲ませていたが、一方の手で美容の薬を持ちながら、もう片方で少女からシロップを受け取って飲ませると息子が急死した。毒を飲んだと医師がいうので調べると、誤って美容の薬を与えたことが判明。少女を訴えたが勿論無罪となる。母は美容薬の原因となった自分の顔を切り裂き、狂気に陥って死んだ。

この作品の人物達が取り憑かれているものは、たとえそれが恋愛の場面でも、Boccaccio 以来の単なる情熱とはいささか趣きが異なるようである。少なくとも多くの妄執の虜達は、前話の母親のように、まるでかつては我が物であったかのように、恋人や品物に執着している。だから一度取り憑かれると逃れようがなくなるのである。巡り遭いもそうした妄執の産物に他ならない。特に次章で論じる悲劇にはこうした妄執の塊のような人物が多数現れるが、この作品に充ちているこうした執念は、やはりこの時代特有の病気だったと見なすべきではないだろうか。要するに

この時代は、イタリア人にとって基本的にすべてが縮小されていく時代であった。勿論その没落が一時期言われた程急激ではなく、小春日和が長く続いたことは今日の実証的研究の示すとおりではあるが、それゆえに一層没落の予感が重苦しくのしかかり、失うことの恐怖は大きく、一度失ったものへの執着も強かったのではないだろうか。ゼロサム社会どころか、マイナスサム社会にあっては、かつてであれば当然得られたはずのものも得られず、それ故かえて求めるものは全て当然自分が所有すべき筈のものだという思い込みが生じるのではないか。この作品の登場者の思い込みの深さ、たとえば他人の女への厚かましい権利の主張には、そういう説明でも加えないと理解出来ないものがある、それがこの作品の空気を重苦しく澱んだものにしている。Giraldi の才能の乏しさを指摘する人は多いが、結局彼も時代の子であったのだろう。

第四章 問題のノヴェッラと時代の問題について

本章ではまず Giraldi の劇作家としての活動とノヴェッラとの関係を見た後、シェイクスピアの二つの作品の原作を紹介を行うと共に、多少この作品の問題点を指摘して結論に代えておきたい。

まず既に見たとおり、Giraldi は同時代には演劇の理論家および悲劇作者として世に知られていて、以下の9点の作品を書いている。Orbecce, Didone, Cleopatra, Attile, Gli antivalomeni, Epitia, Euphimia, Selene, Eudemoni. その内の7点が本作品中のノヴェッラと同じ題材を扱っている。すなわち Orbecce=II-2, Attile=II-3, Gli antivalomeni=II-9, Arrenopia=III-1, Selene=V-1, Epitia=VIII-5, Euphimia=VIII-10 がそれである。いずれも特に複雑な筋を有していて、いかにも悲劇のシノプシスという感じの作品ばかりである。その中でも特に引用されることが多いのは、第一作の Orbecce で、その残虐さによって強い印象を与えたとされている。それと対応するノヴェッラは以下のような粗筋で出来ている。

第二日第二話 (Lucio) (時代記入なし、ペルシャ、アルメニア) ペルシャ王 Sulmone の王女 Orbecce は父の贈り物を運んで来たアルメニア人の優れた若者 Oronte と恋し合い、パルチア王の求婚を避けるために、Oronte の郷里のアルメニアに駆落ちする。Sulmone の抗議に対して、アルメニア王は事を穏便に収めるためうやむやの内に時を過ごし、二人の間には9年間に二人の男子が生まれて、ほとぼりが冷めたかに思われた。そこで賢い老人の使者 Maleche の説得を聞き入れて Oronte の一家はペルシャに戻る。Sulmone は Oronte を招き二人の家来に捕えさせて絞め殺し、さらに二人の孫の首をもはねて、やって来た娘に夫と子供達の三つの首を見せる。それを見た Orbecce は短剣で父の胸を刺し、自分も胸を突いて死ぬ。

この残酷さがアリストテレスのカタルシスの理論の実践例として、同時代に受け入れられ、9篇もの悲劇を残す契機となった。またVIII-5の Epitia に関するノヴェッラは、Giraldi 自身の悲

劇の題材であると共に、シェイクスピアの『尺には尺を』の原作でもあるとされている。

第八日第五話 (Fulvia) (皇帝 Massimiano ママ＝Massimiliano の Ipsruchi) 皇帝の寵臣で、Ipsruchi の知事の Iuriste は、土地の青年 Vico が処女を犯したため、斬首刑を宣告した。哲学を学んだ青年の妹 Epitia が知事を訪ねて、兄が被害者と結婚するからと助命を乞う。娘との議論が気に入った知事は3日の猶予を与えて議論に応じ、ますます娘が気に入り、自分と寝れば兄を許すと約束した。最初は自分の名誉のために拒否した Epitia は、兄の頼みを聞き入れて、必ず兄を許し自分と結婚するという条件で、知事の求めに応じた。知事は牢番に Vico の斬首を命じた後、Epitia と御馳走を食べて一緒に寝た。翌朝知事は牢番に命じて、兄の遺体を娘の家に送らせる。娘は家で遺体を迎えてショックを受け、皇帝に訴える。皇帝に呼ばれてやって来た知事は、皇帝のそばに Epitia がいるのを見て、恐れを抱く。皇帝は娘に知事と結婚することで許してやるように勧めたが、娘はあくまで処刑を求める。やむなく皇帝は知事に対して、娘と寝たことと約束を破ったことという二つの罪で斬首を宣告するが、娘はそれを聞くと突如皇帝に知事の命乞いをして、彼と結婚した。

ついでに『オセロ』の原作を紹介しておく。

第三日第七話 (Curtio) (時代記入なし、ヴェネツィア、キプロス) モーロ人の将軍がヴェネツィア市民の娘 Disdemona と恋して相愛の仲となり、彼女の親戚の猛烈な反対を押し切って結婚した後、隊長としてキプロスに派遣される。美男の Alfieri (旗手の意) は彼女に恋して言い寄り、振られたので隊長の家に親しく出入りする小隊長 (あるいは水夫団の長か) が彼の恋仇だと思い込み、モーロ人に二人の仲を中傷した。Alfieri は Disdemona がいつもの習慣通り彼の妻を訪ねて来て幼女と遊ぶ際に、モーロ人の隊長が妻に与えたハンカチを盗み、小隊長の家の中に落として彼に拾わせ、彼の家をのぞき、彼の家の婢がそれを持っているという事実を戸外からうまくモーロ人に目撃させる。嫉妬の余り、夫はあくまで潔白を主張する妻を殴り殺し、天井から梁が落ちて来たことにしてごまかす。Alfieri はモーロ人の命令で小隊長に闇討ちをかけたが、殺害に失敗して脚を傷つけただけで終わる。すると逆に自分は隊長の命令で小隊長を襲ったのだと証言して、モーロ人を妻殺しと部下の暗殺未遂の罪で告発する。その結果、隊長は共和国から追放されて、亡命先で亡き妻の親戚に暗殺されてしまう。Alfieri は祖国にもどるが、再び他人を殺人罪で告発したため、反論されて拷問を受け、その苦痛で出獄後に死んだ。

シェイクスピアの作品と比較すると、モーロ人は戦争の指揮には優れているが、妻殺しの完全犯罪を目論んだり、Alfieri に親しい部下の暗殺を命じたりする、はるかに卑劣な人物として、いわば等身大の傭兵隊長として描かれている。オセロは立派過ぎるが、Giraldi の傭兵隊長なら、

イタリア・ノヴェッラでしばしばお目にかかることが出来る。それに対してイタリアのイアーゴすなわち Alfieri はシェイクスピアの人物程饒舌ではないけれども、かなりそれに近い存在だと言えるだろう。すでに前章でも触れたが、自分が美男子でモーロ人がそうではないというだけの理由で、彼は当然自分のものであるべき女性を、不当に他人に奪われているという感じ方をする。だからその執着心は他に転じようがない。例えば第五日の最後に語られた、ジェノヴァの郊外の泉の女性像の原因となった美男子のように、こうした人物はこの作品の至る所に現れる。こうした悪人は、シェイクスピアによって一種の典型にまで高められたので、哲学的な思弁の対象にされ易いが、その根拠をたどりそこに大小多数の類似した存在を見出すならば、結局この時代のイタリアの産物だと認めざるを得ないのではないか。しかし Giralaldi はあくまで他者として、こうした人物を嫌悪の対象としてもっぱら外から描いている点に特徴がある。

G. Lebatteux はその論文「『気晴らし』と『百物語』における悪戯の危機」¹⁾において、いずれもすでに第一章で見たとおり聖職者を作品の中に取り上げて笑うことを避けて、好んで貴族を描いた Parabosco と Giralaldi において、ノヴェッラの悪戯の伝統がノヴェッラそのもののまでを巻き添えにして衰弱していく有り様を見出しているが、問題は彼らが単に反動宗教改革の圧力のために聖職者を避けたというわけではない、という点にある。むしろ彼等はその内部から新しい時代に順応して行ったのであり、悪戯の中にまさに Alfieri の悪意を見てこれを避けたのである。Giralaldi の内にはノヴェッラの伝統の崩壊が見られるが、まさに彼こそこの時代相応の表現者であった、とも言えるのではないだろうか。

注

- 1) テキストは G. Giralaldi Cinthio, *Gli Hecatommithi*, Venezia 1566.
- 2) 伝記についての主な文献は
Diretto da V. Branca, *Dizionario Critico della Letteratura Italiana*, V. III, Torino 1986, pp. 392-394 (Pia Malgarotto).
P. e J. Bondanella, *Dictionary of Italian Literature*, Connecticut 1979, pp. 248-250. B. Porcelli, *La novella del Cinquecento*, Roma-Bari 1979, pp. 86-88.
Di Francia, *Novellistica*, Milano 1924-25, pp. 62-104.
- 3) 拙稿、Girolamo Parabosco の『気晴らし (I Diporti)』の輪郭、『大阪外国語大学論集』第5号(1991)所載、p. 136, 参照。
- 4) 拙稿、紙の上の宮廷、『イタリア学会誌』X1 (pp. 44-69)、東京 1990 参照。
- 5) B. Gamba, *Delle Novelle Italiane in Prosa*, Firenze 1835, pp. 118-122.
- 6) Id., p. 122. Firenze の Borghi より刊行。
- 7) D. O. I. L. によると対話の部分だけが L. Bryskett によって、*A Discourse of Civil Life* として翻訳され、1606年に刊行された。
- 8) Di Francia, op. cit., p. 69.
- 9) A cura di G. Salinari, *Novelle del Cinquecento*, Torino 1976, pp. 554-560.
- 10) *Novelle*, op. cit., pp. 560-572 e a cura di M. Ciccuto, *Novelle Italiane Il Cinquecento*, Milano 1982, pp. 434-447.

- 11) G.Lebatteux, La crise de la beffa dans les Diporti et les Ecatommithi, in' FORMES ET SIGNIFICATIONS DE LA 《BEFFA》 DANS LA LITTERATURE ITALIENNE DE LA RENAISSANCE', Paris 1972.

(本研究は平成三年度文部省科学研究費補助金一般研究(c)による研究の一部である。)

(1991. 10. 17 受理)